

ブラジル長期報告書 第4回

国際バイオビジネス学科 4年 竹中奏絵

今回はブラジルのクリスマス、年越し、国内地域差の三点について報告する。

・ Natal (クリスマス)

ブラジルのクリスマスを大学の友人の家で過ごした。24日昼過ぎから夕食の準備を手伝った。伝統的なクリスマスに食べられる鳥の丸焼きやケーキ等、人数分よりはるかに多くの食べ物が並んでいた。9時半ごろから夕食が始まり、日付が変わる深夜12時前になると家の前の道に全員ででて、25日のクリスマスを迎えるのを待った。日付が変わると街の広場で花火が上がったり、爆竹でお祝いしたり、そして「Feliz Natal」と言いながら友人宅の家族や同じように外に出ていた近所の方々と抱擁しあった。日本の恋人のためのイベントになっているクリスマスとは違い家族で過ごすもので、カトリック教徒が大半を占めるブラジルにとって本当に大切な日ということを感じた。日本にいたときは自分が仏教徒だと思えることはほとんどなかったが、ブラジルに来てから感じていた宗教の違いというものを感ずる行事であった。

・ Ano Novo (新年)

ブラジルの年越しについてこの時は二年前学科の研修でお世話になった大島正夫さんの家で過ごした。二年ぶりにこの町を訪れたが案外覚えていることも多く懐かしかった。

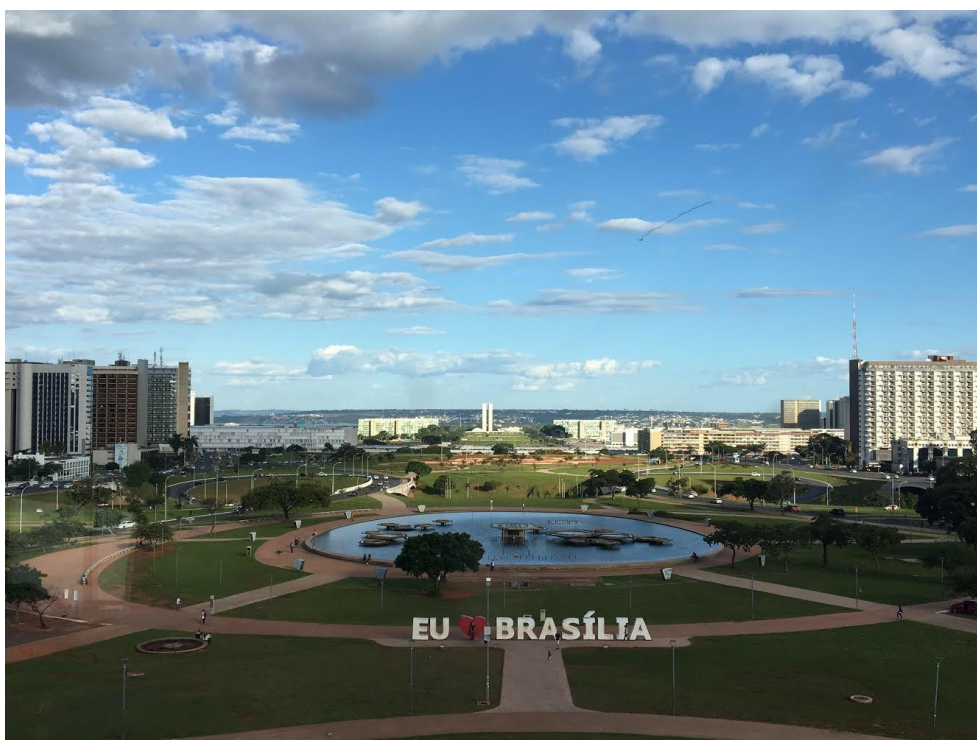
30日はこのあたりの日本人会餅つきに参加した。午前中の準備から手伝い、久しぶりに餅を食べ、年越しそば等日本食を味わった。本格的に臼を使い餅つきをしていたり、手分けして準備しているところを見ると、日本より日本文化を守っているように思った。日本の地方では過疎化に伴い地域での集まりがだんだん衰退しているように思う。ブラジルでは餅もあんこも自分たちで作らなければほとんど手に入らず、また売っていたとしても高価である。日本なら買ったほうが安いし、簡単だが文化を守るためには多少の不便さも必要なのではないかと思う。

サマータイムもあり日本との時差はマイナス11時間だ。私が滞在した家はNHKをつないでいたため、朝起きてから午前中の紅白歌合戦を観た。まだ年越し前の昼にもかかわらず年越しの光景が映ったことが奇妙だったし、日本の友人からも早めの年明けの連絡が入っていた。普段はあまり感じないがこういう時に「時差」をととても感じ、今は違う国にいるのだと思う。その後、前日とは変わりブラジル流の年越しを体験した。昼頃から大島さんが家族ぐるみで仲良くしている方の合流し、借りた家で夕食のための会場準備をした。

昼食も兼ねながら準備をし、終わると一度家に戻り着替えをしてから出かけた。知り合いで声を掛け合っていたのか 15 人前後が集まっていた。新年を迎えるにあたり新品の下着を着用すること、着る服の色によってどんな年にしたいか表し、白（平和）、黄（お金）が多くみられた。そして新年を迎えたときはシャンパンで乾杯するのが決まりだそう。日本の家族団らんゆったり家で過ごす年越しとは真逆なものを体験し、ブラジル流の過ごし方も素敵ではあるが私は慣れ親しんだ日本流の年越しのほうが自分に合っていると思った。

・国内地域差

後期終了後の夏休みを利用し、サンパウロ以外の州を 7 ヶ所まわった。今回訪れたのは、ミナスジェライス、ブラジリア、バイーヤ、ペルナンブコ、サンタカタリーナ、パラナ、マツトグロッソドスルである。赤道よりのペルナンブコからアルゼンチンに近いパラナやサンタカタリーナまで、北海道から沖縄までの距離より移動したと感じた。緯度が異なるため同じ夏といってもそれぞれであった。海寄りで赤道に近いことからよりブラジルらしさを感じた地域もあれば、南緯があたり過ごしやすい夏の地域もあった。気候やそれに伴う生活、町の雰囲気など、これほど違いが多く一言では表わせられない国は他にはないのではないか。この地域差がブラジル農業の強みであり、国内自給率が高い要因だと言えると思う。



人工都市ブラジリア